

デカセギと家族(2)

— 農園維持の世帯戦略・B家の場合 —

Argentina Migration and Family (2) Agriculture and Household Strategy

稲葉奈々子・樋口 直人

1. 問題の所在

アルゼンチンの日系社会には、花卉栽培を営む農家が多い。花卉栽培は、クリーニング店と並ぶ二大産業として、これまで日系社会を支えてきた(在亜日系団体連合会 2002, 2006)¹。そして街中に散在するクリーニング店と異なるのは、花卉栽培が文字通りコロニアとして日系農家の集住のもとに行われ、なおかつ家族単位で営む生業という性格が強い点であろう。そして大規模農業が普通のアルゼンチンにあって、野菜栽培と並んで数ヘクタールを単位とする花卉農家は、小規模経営が圧倒的に多く、移民二世以下への継承がうまくいっていない産業でもある。この点では、多くが一代ないし二代で店を閉めてしまうクリーニング店と共通している。

花卉栽培が始まったのは戦前だが、それを広げたのは戦後移民であった。しかし、戦後移民の二世の多くは花卉栽培に魅力を見出さず、他の仕事へと転じていった。だが、数は

多くないが世帯ぐるみで花卉栽培を続けようとする農家も存在する。本稿では、そうした農家の1つであるB家の事例を取り上げて、デカセギと花卉栽培への投資、花卉栽培という基盤が持つ意味について具体的にみていくこととしたい²。

2. B家の構成

(1) B家の構成

B家は、二世の兄弟と一世の姉妹同士が結婚した2つの世帯がもととなっている(図1参照)。それぞれ、兄(ホセ)・姉(良子)、弟・妹という組み合わせで結婚し、両方の家ともにブエノスアイレス郊外で花卉栽培をやってきた³。良子と妹は一世で小さい頃に移民したため、日本語もスペイン語もできる。ホセと弟は、二世のため日本語がある程度はできるがそれほど得意ではない。その子どもたちは、周囲はほとんど日系人というコロニアで育ち、祖父母とは日本語を話していたため、

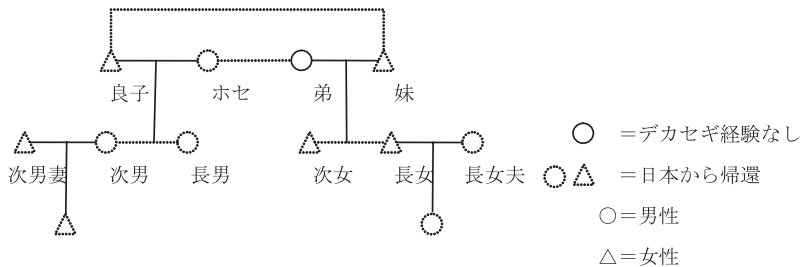


図1 B家の構成

会話はある程度できる。

ホセと良子、弟と妹の夫婦共に子どもが2人おり、良子とホセは長男と次男、弟と妹には長女と次女がいる。このうち、弟以外は全員日本にデカセギに行っており、次男と長女は日本で知り合ったアルゼンチン人とブラジル人とそれぞれ結婚し、子どもも日本で生まれた後に帰国した。そのため、2007年8月時点ではB家の全員がアルゼンチンに戻っており、長女と次男は独立して家を構えたため、世帯は2つから4つに増えている。

調査は、2006年12月22日と2007年7月22日にコロナを訪問し、全員に対して聞き取りを行った。ただし、次男は2006年時点で帰国していなかったため、次男と次女の妻に対しては2回目の訪問時のみインタビューをしている。

3. ハイパーインフレとデカセギの開始

B家のデカセギは、ハイパーインフレだった1989年に始まる。当時、花は贅沢品だったので売れなくなり、多くの花卉栽培農家が苦勞していた。B家も例外ではない。良子と妹の叔母2人は、B家がデカセギに行く前から日本で働いていた。そのため、良子と妹は叔母たちを頼って渡日する。最初は、叔母たちが働いていた家政婦紹介所に登録して病院の付添婦として働き始めるが、すぐホームシックになって1週間でやめてしまった。良子によれば、日本で生まれたといっても外国のようなもので心細い、そんななかで親族とも離れ、24時間つききりで仕事をするのは堪えられなかったという。

そのため、良子も妹もアルゼンチンでの知り合いに頼んで、湘南台の派遣会社⁴で働くようになる。だが、このときには時給800円で8ヶ月しか働いていない。アルゼンチンでのハイパーインフレも収まり、状況が良くなってきたので戻ってきたらどうかという夫からの話があり、子どもたちも夫たちが世話して

いたが母親が帰ったほうがいいという判断だった。短期間だし女性の賃金水準が男性より低いこともあり、このときには球根を買う分くらいの貯金しかしていない。

4. 家族単位のデカセギへ

その後、アルゼンチンの経済が回復して花もよく売れるようになり、双方とも家を建て替えるくらいの余裕が生まれた⁵。だがそれも長くは続かず、経済の悪化とともにB家のデカセギは第二期に入る。このときには、子どもたちが中学を卒業する時期にあっており、それぞれの子どもが渡日した点で、89年のデカセギとは異なる。

第二期の先陣を切ったのは長男であり、95年に中学を卒業してすぐデカセギに出た⁶。彼は、勉強が嫌いで大学に行く気もなかったし、日本を知りたいという希望もあったという。彼自身、日本語の会話にはだいたい不自由しなかったし、近所の人を頼っていけばよかったので渡日後の心配もなかった。そうして長男が行ったのは鶴見の電設会社であり、そこで働くのはアルゼンチンから来た一世がほとんどだったという⁷。同じく一世である良子の弟も2ヵ月後には長男に合流し、一緒に住んでいた。電設会社の主な業務は、ケーブルを引っ張る力仕事であるが、時給は1400円で仕事もあって悪くなかった。彼は1年半同じ会社で働くが、1年過ぎると同僚のペルー人と毎週ボーリングを楽しみ、自分のボールや靴を買ったりジャパンカップまで見に行く凝りようで、貯蓄ができなくなったという⁸。1年半して帰国したときの貯金は1万2千ドルであり、それはすべて花卉栽培のために使った。

長男の渡日から2ヶ月して、良子と妹は2度目のデカセギに、それに中学を卒業した次女も加わってデカセギに出た。このときにも近所の人に日本の派遣会社を紹介してもらい、直接そこに出向いて今度は3人も草津温泉

の旅館で仕事を得る。そこで皿洗いや雑用を1年だけして、1年オープンの航空券の有効期限が切れる間にアルゼンチンに戻った。草津温泉では時給1000円で、住み込みだしお金を使うところもなかったので、1年で1人1万5千ドル貯まったという。この貯蓄も、花卉栽培の建て直しに使っている。

これ以降、良子・ホセ夫婦と妹・弟夫婦の戦略は分岐していく。97年には、良子は今度は夫のホセと一緒にデカセギに出て、すぐに次男も大学をやめて日本に行った。残されたのは長男だけであるため花卉栽培は放棄し、長男は両親に出資してもらってアルマセン(食料品店)を始めるかたわら、家の留守宅を管理する。一方の妹・弟夫婦の家では、97年に長女と次女と一緒にデカセギに行ったものの、両親は残って花卉栽培を続け、デカセギに出ることはなかった。

良子とホセは、草津温泉のときと同じ派遣会社に連絡し、今度は新宿駅西口の清掃業務につく。この仕事は東京都からの請負で、一時はほとんどが南米からのデカセギ組が清掃員をしていた(樋口 2007)。2人は新宿区のアパートに住み、土日も休みなく新宿駅西口に通い続ける。良子の時給は900円、ホセの時給は950円であり、ホセの賃金は他の男性デカセギ労働者に比べて少ないし、休日も働くが残業もない⁹。しかし、ホセはこのときすでに60歳を過ぎており、他に仕事のあてもなく身体的にも楽で2人で勤務できるこの仕事はよかったという。そのため、貯金もスローペースでしか貯まらないが、気楽な仕事で日本の生活に慣れた結果、2人はずっと新宿駅西口で働き続けた。

次男は、日本にいる友人から派遣会社の連絡先を教えてもらって仕事を決め、日本到着後すぐに川崎市の弁当工場で働き始めた。だが、仕事のペースが速くて慣れるのに苦労していたところを、社長が代替わりしてさらに要求が厳しくなったので、ここを10ヶ月でや

めて両親のアパートに身を寄せて仕事を探す。若くて日本語ができることもあり、インターナショナルプレスをみて応募した所沢の弁当工場での仕事が1ヶ月でみつかった。

それから帰国までの9年近く、次男はこの弁当工場で働き続けてラインの責任者になる。最初の時給が1200円で、1年後には1300円まで上がったし、残業もたくさんあり、アルゼンチン人もたくさんいるのが定着の要因の1つだろう¹⁰。しかしそれより大きな要因は結婚であり、彼は工場の同僚であるアルゼンチン人と2000年に日本で結婚した。2001年には子どもも生まれ、子どもを見せるために一時帰国するが、それ以外はずっと日本で生活続ける。良子夫婦と次男夫婦の家はともに西武新宿線沿線にあり、1ヶ月に2、3回は良子夫婦のアパートに来るくらい家族の絆は保たれていた¹¹。

他方、弟夫婦の長女と次女は、97年に斡旋業者がアルゼンチンの自宅を直接訪問して日本行きを勧誘したので、特に強い動機もなく渡日した。次女は、1年の日本滞在から帰ってからは花卉栽培の手伝いしかしていなかったため、それならばと姉を誘ったという。次女は2回目の渡日だが、長女は当時保険会社で働いており、それをやめての初渡日だった。それから99年までの2年半、2人は栃木県内の3つの工場を渡り歩きながらもずっと同居生活を送る。しかし99年に2人で一時帰国した際に、長女はすぐ日本に戻るが次女はそのままアルゼンチンに残った¹²。長女が戻った最大の要因は、2つ目の工場で知り合ったブラジル人と交際していたからである。そのため長女は、そのブラジル人と結婚して子どもが1歳になるまで、日本で仕事して出産して子育てをすることとなった。

次女は、3年半の日本就労で貯めた3万5千ドルを親に預けて、花卉栽培にも使えるようにした。99年から数年は農場を手伝い、2002年からはデカセギの貯蓄を利用して友人

とアルマセンを開いていたが、3年後には閉めてその後2年間は、街中にある日系人の店で半日だけ働く生活を送る。2007年にはその仕事もやめて、弟夫婦の花卉栽培を手伝うだけになっていた。

5. 帰国と農園の拡大

2000年の時点で、B家でアルゼンチンに残っていたのは弟夫婦と長男、次女になるが、この状態は2005年から急速に変化する。子どもが1歳になった長女夫婦は、貯金するため自動車も買っていなかった。だが、今市市という交通の便が悪いところでは医者に行くのも大変だった。夫も長女も、それぞれ自分の国に帰りたいと主張していたが、ブラジルよりアルゼンチンのほうが経済的にやっていきやすいという判断から、2005年にはアルゼンチンに生活基盤を移している。

それから長女夫婦は、日本での貯蓄3万5千ドルを投じて農地を買い、花卉栽培を始めることになった。これは、夫がブラジルでも

中学の途中で渡日して日本では学校に行かず、アルゼンチンでも学校に行っていないことを考えると、農家のほうがいいという判断による。農地は、持ち主が亡くなって売りに出されていた近所の花卉農家を買取る形となり、帰国前に弟夫婦が買っておき温室6本は援助してくれた¹³。それに5本を自分たちで建てて、11本の温室で2005年から花卉栽培を始めている。このほか、日本にいるときに町の近くに家を一軒購入して賃貸に出しているため、夫婦と子ども1人の生活はしているという。

ホセ夫婦も、ホセが70歳になって仕事もなくなるため、2006年に帰国した。このときには、2001年の経済危機からアルゼンチンも立ち直りつつあり、花もどうにか売れていたから花卉栽培の再開を決めていたという。荒れていたとはいえ温室もあり、家もあるからトラクターや自動車など必要な設備を買い足し、温室を30本に増やしての再開であった¹⁴。このときには、親の援助でアルマセンを営んで



写真 温室の風景。今でもほとんどの温室は写真のような木の骨組みを使っている。

いた長男も店を閉め、花卉栽培を手伝うようになってい

る。最後に、日本で生まれた子どもが5歳になっていた次男も2007年に帰国した。彼の場合、子どもが生まれた時点で就学前にアルゼンチンに帰ることを決めており、帰国は予定の行動であった。次男夫婦の貯蓄は、結婚してから将来を考えて節約するようになったため、10年間の滞日で10万ドルに達していた。そのうち5万ドルは2002年に購入した家に使っており、残る5万ドルは自動車を一台中買った他は貯蓄している¹⁵。ビジネスをやるつもりはなく、帰国後半年たった2007年7月には、家族で一定水準の生活できる目安の2000ペソの給料を目安に、職を探している最中であった。ただし、まだ履歴書を数枚送った程度であり、普段は良子夫婦の農場を手伝って生活費を得ている。

6. 農園維持の世帯戦略

図2によりB家のデカセギ歴をおさらいしておこう。このなかでデカセギに行っていないのは弟だけであり、弟は隣接するホセの家も含めて留守宅を管理し農園を維持する役割を担っていたといえる。そしてデカセギは、89年のハイパーインフレの時期をしのごために、農家での補助的労働力たる妻2人が8ヶ月行ったことから始まった。さらにメナム政権下での新自由主義政策が行き詰まりを見せ

始めた95年には、再びデカセギが選択されている。このときは、学歴を終えた子どもたちが参入し、新たな局面を迎えている。そして2005年以降にはいわば帰国ラッシュともいえる状況が生じて、全員がアルゼンチンに戻ってきた。

89年から2007年までのB家のデカセギをめぐるあゆみをみてきたところで、B家の全員が花卉栽培に携わるようになったところに行き着いた。人に使われない気楽さがあるとはいえ、休日もなく体を使う花卉栽培農家のほとんどは、現在後継者を見出せず放置されたままの農地も多い。花卉農家がまとまって残っているのは、エスコバルとラプラタだけでも言われている¹⁶。しかし、B家の場合には次男が農家以外の就職先を探しているものの、長男は両親と働きながら経営を拡大しているし、長女は新たに独立までして花卉栽培を始めている¹⁷。次男にしても、他の仕事を探す間は親のところで働けば生活はしていけるのだ。

ここから得られる知見として、2つのことを挙げることができるだろう。第1に、経済状況が悪化して花が売れないときに、親たちのデカセギは選択されている。そしてその資金を投入することで農園を維持してきたといっ

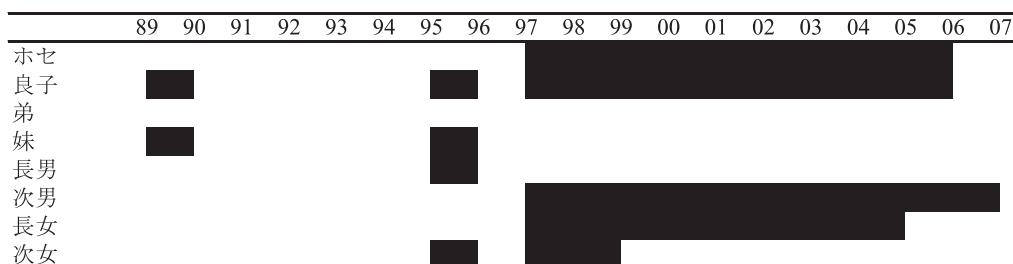


図2 B家のデカセギ歴

在は、アルゼンチンの景気が良いので十分生活していけるというが、また経済が落ち込んだときにはどうなるかわからない不安も残す。親夫婦は年齢的に再度のデカセギは不可能であろうから、子どもたちがまたデカセギに行かねばならない可能性もないとはいえない。また、雹や竜巻といった自然災害が発生した際にも、デカセギは建て直しに有効な選択肢となる。

第2に、筆者らがこれまでアルゼンチンでのデカセギ経験者にインタビューした限りでは、生活基盤を持った自営業層のデカセギは基盤の建て直しや資産の積み増しに有効であった。しかし、そうした基盤を持たない若年層の場合、家業を継ぐこともほとんどない以上、デカセギで新たな生活基盤を作れない限りデカセギ後の持続可能性が確保できなくなる。その意味で、大学に入学しても卒業が難しいアルゼンチンで、学歴より貯金をという選択は、長期的には生活基盤を築けなくなる結果をもたらす可能性もある。その点でいえば、B家ではデカセギにより立て直した基盤を二世が継ぐという継承関係が生まれたとあってよい。デカセギの資金注入がなければ維持しえなかったとはいえ、維持した段階では後継者が出てきている。

当初の動機は急場をしのごうにあったが、結果的には農園を維持する世帯戦略として機能したというのが、デカセギの効用といえるだろう。農園の維持に必要な成員はアルゼンチンに残り、そうでない成員は日本で稼いでくるという戦略は、意図的でないとはいえ功を奏した。1人で短期のデカセギに行っても、ほとんど意味ある結果をもたらさない。若年層のデカセギがはらむ最大の問題はそこにある。だが、B家の子どもたちは短期のデカセギで得た資金は花卉栽培に投資しており、自らの将来の基盤をも築く結果になったとあってよい。つなぎ資金や設備投資のための資金を調達するための戦略的なデカセギは、世帯

を維持するにあたって有効であることを、この事例は示唆している¹⁸。

注

- 1 花卉栽培のコロニアは、ブエノスアイレス郊外に数十存在する。特に大きいのが北に50km行ったエスコバルと南に80キロ行ったラプラタである。
- 2 本稿は、「デカセギと家族」と題する一連の調査記録の一部をなす。調査の過程でインタビューした特徴ある家族について、デカセギと家族のダイナミズムを描き、データを蓄積させて一般的な知見を導出することを目的とする。その第一弾として、樋口・稲葉（2008）がある。
- 3 本稿の固有名詞はすべて仮名である。
- 4 労働者派遣法との関係から、正式には業務請負業と名乗っているが、当事者は誰もが派遣会社と呼びなすので本稿でも派遣会社と表記することとする。
- 5 インフレ対策のため、ドルとペソを1:1の固定レートにした。さらに、新自由主義的な政策のもとで国営事業を大量に売却した結果、一時的には景気が回復している。
- 6 アルゼンチンの中学卒は、日本の高校卒に相当する。
- 7 鶴見では、沖縄からボリビアに移民し、それからアルゼンチンやブラジルに転住し、さらに日本に行った一世が電設会社を営むことが多い。その関係で鶴見の電設会社には南米からのデカセギ者が多数働いており、この点については稿を改めて紹介する予定である。ただし長男が働いたのは、移民が経営するのではない会社だった。
- 8 アルゼンチンからデカセギに行っていた一世よりも、若いペルー人の方が話があって友達になっている。
- 9 良子は若かったので、一時は新宿駅の清掃が終わってから、高層ビル街の清掃もやっ

ていたという。

- 10 南米日系人が日本で就労する場合、自動車関係の工場で働くことがもっとも多いが、アルゼンチン人の場合には弁当工場の比率が高いといっても間違いではないだろう。これは、アルゼンチンから来て日本で派遣会社を営む業者が、弁当工場に食い込んでおり、渡日前に弁当工場を斡旋される場合が多いことによると思われる。
- 11 特に子どもが生まれてからは、孫がかわいくてよく行き来したという。
- 12 次女はアルゼンチンに残りたいとか、日本に行きたくないという積極的な動機があったわけではないという。行きそびれたので残ったが、最初はアルゼンチンに慣れなくて日本に行きたかったという言い方をしていた。
- 13 温室1本を建てるのに1000ドルくらいかかる。
- 14 年間通じて花を出荷できる程度の種類を確保するには、温室30本は必要という。
- 15 経済危機後の景気回復にともない、不動産価格は上昇しており、購入後5年が経過した時点で10万ドルになっているという。
- 16 エスコパールは、ブエノスアイレスの北方50キロ、ロザリオに行く途中にある。戦前から花卉栽培農家がまとまって存在したところでもある。ラプラタは、ブエノスアイレスの南方80キロにあるブエノスアイレス州の州都であるが、コロニアはブエノスアイレス寄りである。ラプラタの場合、JICA（当時は移住事業団）が60年代以降造成した移住地がいくつか存在し、そこに入植したという経緯がある。パラグアイからの転住者が多いのもラプラタの特徴であり、パラグアイ国籍のままデカセギに行く二世も一定数存在する。
- 17 次男は、最初は自分も花卉栽培をやろうかと思ったが、大変な仕事だからそれ以外の雇われ仕事を探すことにしたという。

- 18 この点については、開発経済学や農業経済学での研究蓄積があるが、それについてはまだ把握が十分ではない。今後レビューを行ったうえで、アルゼンチン花卉栽培農家の事例を分析していきたい。

文献

- 樋口直人, 2007, 「新宿駅西口の移住労働者」『Migrant's ネット』105号。
 ——・稲葉奈々子, 2008, 「デカセギと家族(1)——デカセギの意図せざる結果・A家の場合」『徳島大学社会科学研究所』21号。
 在亜日系団体連合会, 2002, 『アルゼンチン日本人移民史 第一巻 戦前編』。
 ——, 2006, 『アルゼンチン日本人移民史 第二巻 戦後編』。

(付記) プライベートなことも含め、お話を聞かせてくださったB家の方々に深く感謝したい。本稿のもととなったデータは、科学研究費プロジェクト「経済危機と国際移民——アルゼンチン日系人のデカセギ戦略に関する研究」によっている。

